

エジプト中王国時代の「宮廷タイプ (Court type)」の 埋葬という枠組みについて

—— 考古資料を中心とした議論 ——

山 崎 世理愛

はじめに

古代エジプトでは、死後の再生・復活のために、死者はオシリス神と同一視されることが重要であった。そして、その考えが強まった中王国時代の埋葬は、いわゆる「宮廷タイプ (Court type)」か否かという点で大別されてきた。「宮廷タイプ」とは、杖類や殻竿、棍棒、短剣といった王権の象徴が副葬品として用いられた埋葬を指し、ダハシュール (Dahshur) 遺跡の王族の埋葬がその典型例として知られている。これら王権の象徴は、死者をオシリス神とみなす役割を担った。しかし、中王国時代において、王権の象徴は王族以外にも副葬されることがあり、これらの埋葬も「宮廷タイプ」と捉えられている。また、実際には「宮廷タイプ」と言ってもその幅は広く、副葬品のアセンブリッジも多様である。そして、発掘調査が進むにつれ、その多様性はますます広がってきている。いまや、「宮廷タイプ」であるかそうでないかという二項対立的な枠組みの中で中王国時代の埋葬習慣を語ることは、限界を迎えているのである。さらに、これまで「宮廷タイプ」の持つ意味については、主に図像資料をもとに考察されており、考古資料を十分に考慮した研究はあまりおこなわれてこなかった。

以上より、本論では、まずこれまで「宮廷タイプ」と大きく括られてきた埋葬について、考古資料をもとにその特徴を捉え直す。そして、この埋葬形態のもつ意味を改めて考えるとともに、「宮廷タイプ」という枠組み自体を再考する。最後に、中王国時代において、王族のように理想的な埋葬をおこなえなかった人々は、来世での再生・復活のためにどのような準備をしていたのかを明らかにしたい。

1. 先行研究

1-1. 「宮廷タイプ」について

「宮廷タイプ」という用語は、1916年に出版されたセネブティシ (Senebtisi) という女性の墓の発掘報告書 (Mace and Winlock 1916) で初めて使われた (Williams 1975-76: 41; Grajetzki 2014: 17-19)。セネブティシは、メンフィス・ファイユーム地域 (図1) のリシェト (Lisht) 遺

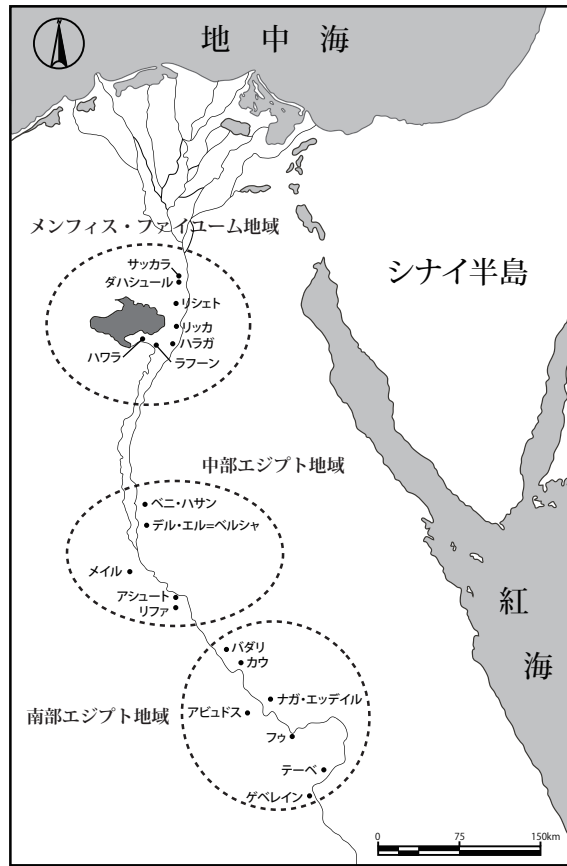


図1. エジプト地図

跡に埋葬された女性で、未盗掘で発見された。そして、棺や副葬品のセットがダハシュール遺跡で発見された王女や王のものと類似していたために、メイスとウィンロックはこれらの墓を一括りに「宮廷タイプ」と呼称したのである (Mace and Winlock 1916: 49-51, 54-56, 114-116)。1970年代には、ウィリアムズ (Williams, B.) がセネブティシの墓の年代を明らかにするために、「宮廷タイプ」と呼ばれるグループの共通点をまとめ、中でも一連の杖類が重要な特徴であると指摘した (Williams 1975-76: 44-47)。また、彼は中王国時代前半の墓に対して、このグループは第13王朝に一般的になる墓であると結論付けた (Williams 1975-76: 51)。しかし、実際には両方の特徴をもつ墓が存在するほか、年代差だけでなく地域・社会階層差も考慮すべきであると批判されている (Lilyquist 1979: 27-28)。

その後、「宮廷タイプ」と類似する埋葬は他にも多数存在することが判明したが、明確な定義はされてこなかった。そのような中、グラジェツキー (Grajetzki, W.) は、改めてセネブティシ、ダハシュール遺跡の王女・王の墓といった「宮廷タイプ」の典型例には、以下のような共通パターンがあると指摘している (Grajetzki 2010: 92-93) 図2。

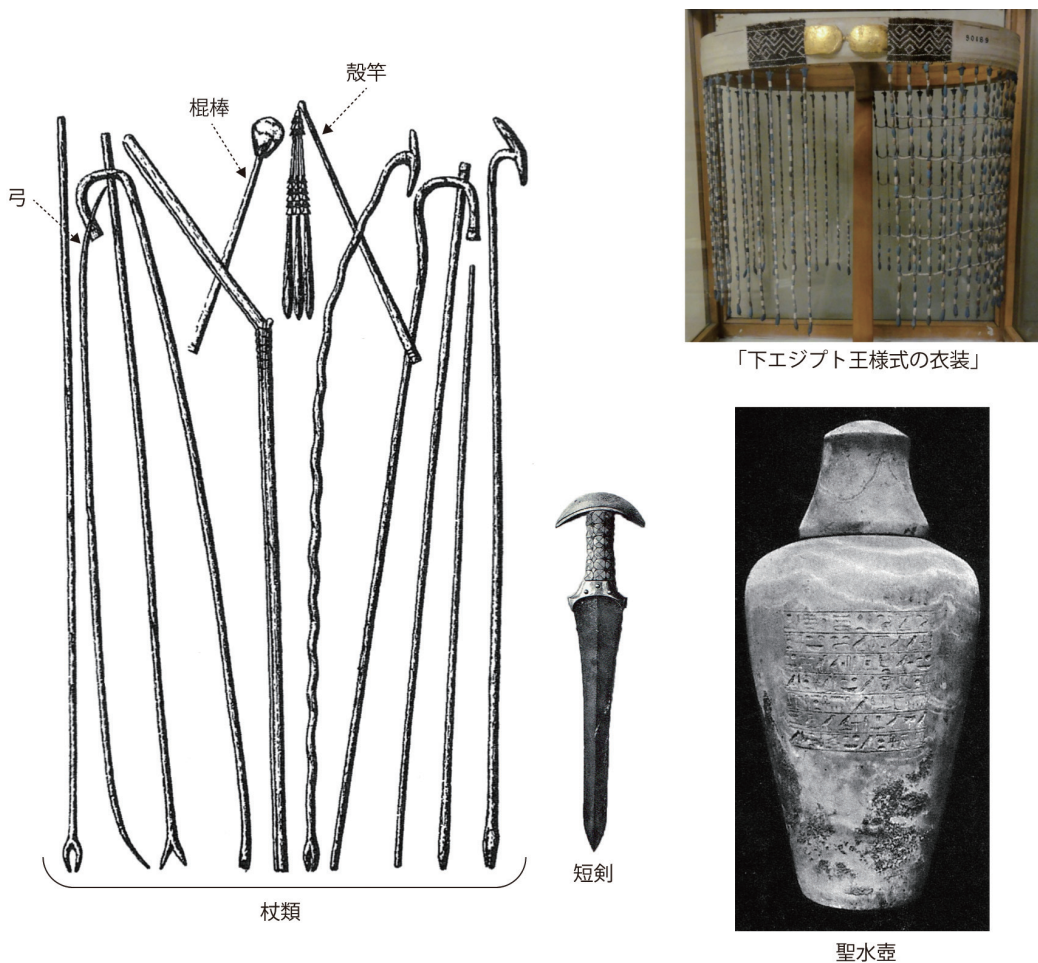


図2. 先行研究における「宮廷タイプ」を特徴づける副葬品の例

(棍棒、穀竿、弓、杖類はリシェト遺跡セセネブネフ墓、短剣はダハシュール遺跡のイタ墓、「下エジプト王様式の衣装」はハワラ遺跡のネフェルウプタハ墓、聖水壺はラフーン遺跡のサトハトホルイウスト墓出土)

- 1) 被葬者は複数の箱型棺と人型木棺あるいはミイラマスクにおさめられる
- 2) 被葬者脇に王権の象徴(2種類のウアス杖、ヘカ杖、棍棒、穀竿、短剣、弓、矢)が置かれる

また、さらに以下のものが副葬される場合もあるという。

- 3) 「下エジプト王様式の衣装 (Lower Egyptian Costume)」⁽¹⁾
- 4) 聖水壺 (vessel for pure water)⁽²⁾

以上のような特徴をもつ埋葬が「宮廷タイプ」であるということだが、特に王権の象徴が副葬されているか否かが大きな判断基準となっている。たとえば、穀竿を構成するビーズ(図3)のみが出土した王族以外の墓も「宮廷タイプ」であり、非常に社会的地位の高い人物が埋葬された

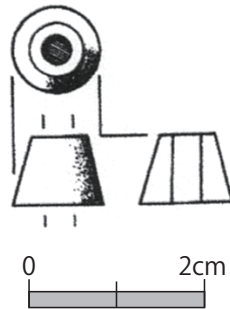


図3. 殻竿に使われたビーズ（リシェト遺跡 shaft 7/26出土）

と考えられてきた (e.g. Grajetzki 2004: 23-25; Grajetzki 2010: 100-102)。なお、王権の象徴は、被葬者を冥界の支配者であるオシリス神と同一視するために用いられたものである (Miniaci 2011: 2)。

このように、「宮廷タイプ」は王族以外にも該当し、王族が埋葬されていないリッカ (Riqqeh) 遺跡やハラガ (Harageh) 遺跡においても確認されている。そのため、ミニアッチ (Miniaci, G.) は「宮廷タイプ」というよりも、「オシリス神化 (Osirification)」あるいは「変容 (transfiguration)」の埋葬と呼称した方が適切であると述べている (Miniaci 2011: 2)。また、グライエツキーは「宮廷タイプ」内の違いを認識し、2つのグループに分けている (Grajetzki 2004: 26-27)。それは、メンフィス周辺の王族墓地に該当するコアグループとエジプト各地で見られる「宮廷タイプ」の一部要素だけを持つグループである。しかし、両者の区分は曖昧で、殻竿ビーズが出土したハラガ遺跡の墓がどちらのグループに属するのかわからない (Grajetzki 2004: 27)。

ここまで、実際の「宮廷タイプ」に関する先行研究をまとめてきたが、グライエツキーは「宮廷タイプ」の持つ意味やその背景に踏み込んだ考察もおこなった (Grajetzki 2004, 2010, 2014)。それは、「宮廷タイプ」は通夜 (hour vigil) と呼ばれる儀式と密接に関わるというものである (Grajetzki 2004: 27-19; Grajetzki 2010: 90-102)。通夜とは、ミイラ処理によってオシリス神と同一視された死者のもとを神々 (神官がその役割を担う) が訪れるという儀式で (Assmann 2005: 260-262; Grajetzki 2010: 90; Hays 2010: 6)、死者が墓に入れられる前夜におこなわれる (Assmann 2005: 262, 266; Grajetzki 2010: 90)。通夜によって、死者が守られるとともに (Assmann 2005: 262-264)、新たな生命がもたらされるのである (Willems 1997: 358)。すでに、様々な装飾が施された箱型木棺は通夜を再現していて、その中におさめられた被葬者はオシリス神として扱われたと指摘されていた (Assmann 2005: 270; Willems 1997)。その通夜と関連する図像資料として、さらに以下2種類が提示されている (Willems 1997: 359; Grajetzki 2010: 90-91)。それは、中王国時代前半の箱型木棺内側に描かれたオブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*) と後の第3中間期の棺に描かれた場面である。まず、オブジェクト・フリーズ (図4) には、ミイラ処理や王族

の儀式 (royal object ritual) に由来するものが描かれた (Willems 1997)。そこには、ミイラ化の儀式で用いられたアंकやこし器 (sieve) のほか、杖や武器類が描かれた。次に、第3中間期の棺には、ライオンの装飾が施されたベッドに横たわるオシリス神にホルス神が生命をもたらして、その周りに多数の神々が表現されるというまさに通夜を表現した場面が描かれた (Willems 1997: 357-359; Assmann 2005: 270; Grajetzki 2010: 90)。オシリス神の横たわるベッドの下には、杖や弓など多数の王権の象徴が描かれている (図5)。そして、それらのほとんどはオブジェクト・フリーズに示されたものと同一であるという (Willems 1997: 359)。グライエツキーは、これら通夜を表した図像表現に含まれる杖や弓などが実際の「宮廷タイプ」に納められたものとも合致することから、「宮廷タイプ」とは、通夜の儀式がおこなわれるミイラ処理の部屋 (embalming chamber) 自体を再現した埋葬形態であると主張したのである (Grajetzki 2004: 27-29; Grajetzki 2010: 90-91; Grajetzki 2014: 150)。このように、「宮廷タイプ」のもつ意味については、図像資料を主な根拠として考察されてきたと言える。

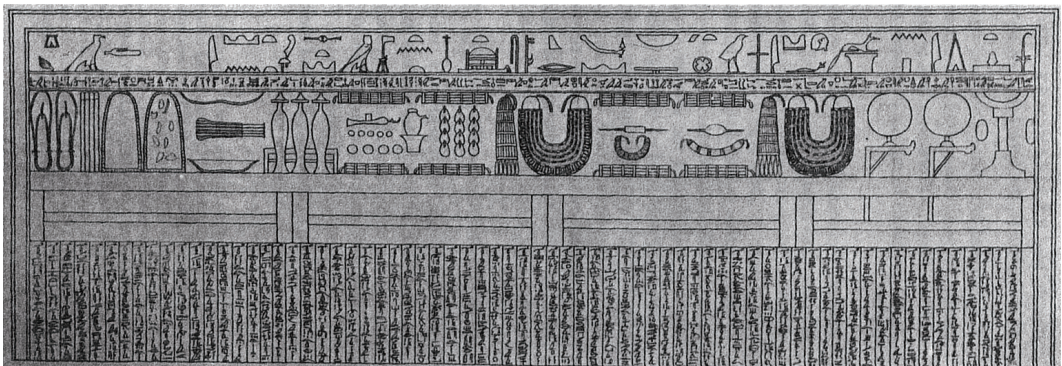


図4. オブジェクト・フリーズの例

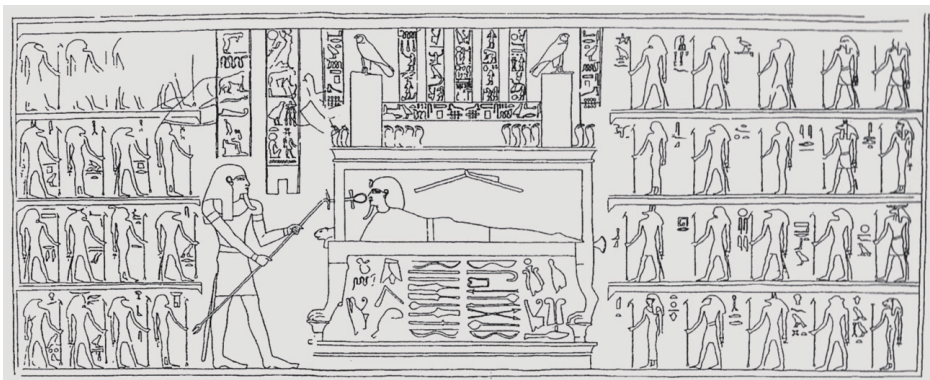


図5. 第3中間期の棺に描かれた通夜の場面

1-2. 中王国時代における埋葬の階層性について

中王国時代前半（表1）は、地方有力者の力が強く、彼らは巨大な墓を造営した。また、当該期の木棺には鮮やかな装飾が施されたが、それは各墓地遺跡によって様々で、地域色が色濃く見られる。このことから、中王国時代前半には各墓域で木棺が製作されていたと推測されており（Grajetzki 2016: 25-26）、地方有力者の突出した社会的地位や財力の大きさを示している。

中王国時代後半（表1）になると、中央集権が強化された結果、地方に巨大な墓が造営されることはなくなり、木棺の地域色も見られなくなる（Grajetzki 2016: 37-38）。そして、埋葬に見られる階層性については、「宮廷タイプ」と関連した議論がおこなわれてきた。グラジェツキーは、ハラガ遺跡の資料をもとに、中王国時代後半には3つの埋葬タイプがあったと指摘している（Grajetzki 2014: 147-163）。まず、タイプ1は「宮廷タイプ」で、上述した王権の象徴が副葬された埋葬が当てはまる。次に、タイプ2は副葬を目的とした葬送用品が納められたほか、タイプ1と同様に被葬者を神として扱うことを最も重要視していた埋葬を指す。しかし、王権の象徴が副葬されていないという点でタイプ1とは異なる。最後に、タイプ3は葬送用品が納められていない埋葬である。この埋葬には、カバなどの動物や女性を象ったファイアンス製小像といった呪術的なものが入れられた点が特徴として挙げられており、被葬者がオシリス神や他の神として捉えられていた様子は全く見られないという（Grajetzki 2007: 51）。そして、このような種類の副葬品は、「宮廷タイプ」には納められないと言われてきた。つまり、「宮廷タイプ」の特徴は、多重棺や王権の象徴が埋葬に用いられている点だけでなく、ファイアンス製小像といった呪術的な

表1. 中王国時代の年表

古王国時代	前 2700 - 2150 年
第1 中間期	前 2150 - 2000 年
中王国時代	前 2000 - 1650 年
第11 王朝後半	
メンチュヘテプ2世	前 2008 - 1957 年
メンチュヘテプ3世	前 1957 - 1945 年
メンチュヘテプ4世	前 1945 - 1938 年
第12 王朝	
アメンエムハト1世	前 1939/1938 - 1909 年
センウセレット1世	前 1919 - 1875/1874 年
アメンエムハト2世	前 1877/1876 - 1843/1842 年
センウセレット2世	前 1845/1844 - 1837 年
センウセレット3世	前 1837 - 1818 年
アメンエムハト3世	前 1818/1817 - 1773/1772 年
アメンエムハト4世	前 1773 - 1764/1763 年
セベクネフェルウ女王	前 1763 - 1759 年
第13 王朝	前 1759 - 1600 年
第2 中間期	前 1650 - 1550 年
新王国時代	前 1550 - 1069 年

ものが副葬品に含まれていないことが挙げられるのである (Williams 1975-76: 49-51; Grajetzki 2003: 57; Grajetzki 2007: 48-51; Miniaci 2014: 129-130)。その理由として、「宮廷タイプ」はオシリス神化に必要な副葬品をすでに所有しているため、再生復活を目的としているファイアンス製小像を副葬する必要がなかったからであると言われてしている (Miniaci 2014: 129)。以上、中王国時代特に後半の埋葬については、「宮廷タイプ」であるか否か、葬送用品・呪術的な要素を持つ副葬品の有無が判断基準となってグルーピングされていると言える。

2. 先行研究の問題点と本論の目的

ここでは、「宮廷タイプ」に関する先行研究の問題点を挙げ、それをふまえた本論の目的を提示する。上述の通り、「宮廷タイプ」についてはグライエツキーを中心に研究が進められてきた。社会階層の高い被葬者に該当する埋葬形態というだけでなく、木棺装飾やその他図像資料の研究を参照しながら、この埋葬形態が持つ葬送観念上の意味合いを考察した点で先駆的であったと言える。ただし、先行研究では考古資料を十分に考慮していないという問題点が挙げられる。まず、「宮廷タイプ」の特徴として、セネブティシや王女の埋葬に見られる共通パターンが抽出されたものの、それは専ら王権の象徴と括られた副葬品に注目したものであった。王族以外に関しても、王権の象徴が出土しているか否かが大きな判断基準となってきた。つまり、杖類、棍棒、殻竿、短剣、弓、矢、時には「下エジプト王様式の衣装」といった王権の象徴と捉えられたものが出土した墓に「宮廷タイプ」という名前が与えられ、特別視されているのである。しかし、こういった副葬品は埋葬を構成するごく一部の要素に過ぎない。そのため、王権の象徴とみなされてこなかったその他出土遺物もふまえた上で、再度「宮廷タイプ」の特徴を捉え直す必要がある。また、「宮廷タイプ」の持つ意味についても、これまでは図像資料を主な根拠として論じられており、考古学的情報が十分に考慮されているとは言えない。実際の考古資料にも焦点をあてることで、この埋葬形態が目指した具体的な側面を明らかにすることができよう。

以上をふまえ本論では、まずこれまで注目されてこなかった考古資料に焦点をあて、「宮廷タイプ」の特徴を捉え直す。そして、これらは何を意図した埋葬形態であったのかを再考し、「宮廷タイプ」という枠組み自体も改めて考える。最後に、理想的な葬送のために人々がおこなった工夫や取捨選択を明らかにし、中王国時代の埋葬習慣の一端を示したい。

3. 考古資料をふまえた「宮廷タイプ」の特徴

Grajetzki 2010, pp.96-102には、「宮廷タイプ」の埋葬として35基がリスト化されているが、基準が曖昧なほか、新資料を加える必要もある。そこで、改めて「宮廷タイプ」の埋葬を集成した結果、49基確認された (表2)⁽³⁾。本章では、これらの墓を対象とし、これまで十分に考慮されてこなかった考古学的情報を中心に、その特徴をまとめる。

表2. 本論で対象とする「宮廷タイプ」の埋葬

埋葬名	墓券名/埋葬者名(称号)	性別	時期	墓構造	棺	壁龕	覆木	柱頭	柱枿	礎石	短剣	弓矢	「ネギバト」土版の残片	他出土遺物	参考文献	備考
	アメンエムハト															
	2世ピラミッド複合体内/イタ(king's daughter)	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、箱形木棺、人型木棺	-	-	+	+	+	+	-	+	カノボス箱、カノボス壺、銀飾り、その他装身具、7つの異なる軟膏壺が納められた木箱(実際は8つの壺)、香料製道具	de Morgan 1903, 45-55, pl.VI; Grajetzki 2010, 96	未蓋掘。王族。
	アメンエムハト															
	2世ピラミッド複合体内/クヌメト(king's daughter)	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、箱形木棺、人型木棺	-	-	+	+	-	+	-	-	カノボス箱、銀飾り、その他装身具、土器、白鳥の木像、木箱(ジュエリー・ボツクス)、アツの理なる軟膏壺が納められた木箱、動物骨	de Morgan 1903, 55-68; Grajetzki 2010, 96	未蓋掘
	アメンエムハト															
	2世ピラミッド複合体内/イタウエト(king's daughter)	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、箱形木棺、人型木棺	-	-	+	+	+	-	-	-	カノボス箱、銀飾り、その他装身具、土器、銀、白鳥の木像、7つの異なる軟膏壺が納められた木箱(実際は8つの壺)	de Morgan 1903, 73-74; Grajetzki 2010, 97; Grajetzki 2014, 60-61	未蓋掘。発掘報告書内の記述が不十分で詳細不明。王族。
	アメンエムハト															
	2世ピラミッド複合体内/サトハトホルマリト	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、箱形木棺、人型木棺	-	-	+	-	-	-	-	-	カノボス箱、カノボス壺、土器、動物骨、一本足テーパー、7つの異なる軟膏壺が納められた木箱(実際は8つの壺)、白鳥の木製像	de Morgan 1903, 74-76; Grajetzki 2010, 97	王族? 王女の称号は持っていない。発掘報告書内の記述が不十分で詳細不明。
	セムワセレト3世ピラミッド複合体内/Pyr amid 2/ネアエトヘスウト(king's wife)	F	Aメ3?	ピラミッド	石棺	+	-	-	+	-	-	-	-	石製容器、ファイアアンス製の土台?	de Morgan 1895, 73; Arnold 2002, 61-63, 123; Grajetzki 2010, 98	-
	ダハシュエール															
	セムワセレト3世ピラミッド複合体内/tomb 9/サトハトホル(king's daughter)	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、人型木棺	-	-	-	-	-	-	-	-	カノボス箱、木箱(ジュエリー・ボツクス)装身具、石製容器、銀、コホルス壺、土器、眼の象嵌	Arnold 2002, 73, 124; Grajetzki 2010, 97	王族
	セムワセレト3世ピラミッド複合体内/tomb 11/シエ//king's daughter)	F	Aメ3	地下回廊墓(gallery tomb)	石棺、木棺	-	-	-	-	-	-	+	+	カノボス箱(石製・木製)、カノボス壺、土器、動物骨、石製容器、目の象嵌、装身具	de Morgan 1895, 57; fig.125; Arnold 2002, 74, 124, 125	-
	セムワセレト3世ピラミッド複合体内/北側/サトウエト(Ornament of the King)	F	Aメ3	前室付きシャト墓	石棺、箱形木棺、人型木棺	+	-	+	-	-	-	+	+	カノボス壺の入ったカノボス箱(壁龕から)装身具、土器	Patch 2002, 916-916; Arnold 1996, 24; Grajetzki 2010, 98	未蓋掘。未報告。
	アメンエムハト															
	3世ピラミッド内部/アケメトネフェルヘシエト(king's wife)	F	Aメ3?	ピラミッド内部	石棺	-	+	-	-	-	-	-	-	カノボス壺、石製容器、土器、	Arnold 1980, 20, pl.15a; Grajetzki 2010, 98	-
	アメンエムハト															
	3世ピラミッド内部/アケメトネフェルヘシエト(king's wife)	F	Aメ3?	ピラミッド内部	石棺	-	-	-	+	-	-	-	-	石製容器、動物骨や肉の入ったアヒル形石製容器	Arnold 1980, 20; Grajetzki 2010, 98	-

エジプト中王国時代の「宮廷タイプ (Court type)」の埋葬という枠組みについて

道跡名	墓番号/被葬者名(称号)	性別	時期	墓構造	棺	壁画	壺	杖頭	棍棒	燧石	短剣	弓矢	「エジプト王様」の衣類	他出土遺物	参考文献	備考
	アメムエンハト3世のピラミッド北側/ヌベアデプティイ(king's daughter)	F	13王朝初期	前置付き前部屋シャフト墓(シヤフト墓は斜路)	箱型木棺、人型木棺	+	+	+	+	+	+	+	「エジプト王様」の衣類	カノボス箱、カノボス蓋、飾り、その他装身具、土器、石製容器、動物骨、鏡、ヒエログリフs形製品、7つの型なる軟膏壺が納められた木箱(実際は8つの型)、コホル	de Morgan 1885, 1895, figs.250, 253。段107-117; Grajetzki 2010, 99; Grajetzki 2014, 71-81	一部王権の象徴や鏡、ヒエログリフs形製品は前置陣にあった重方体の木箱から出土(de Morgan 1895, figs.250, 253)。段107-117; Grajetzki 2010, 99; Grajetzki 2014, 71-81は棺内から出土(de Morgan 1885, fig.264)。石棺の有無は不明。王族。
ダハシユール	アメムエンハト3世のピラミッド北側/ホル王	M	13王朝初期	シャフト墓	石棺、箱型木棺、ミイラマスタ	+	+	+	+	+	+	+	「エジプト王様」の衣類	カノボス蓋、櫛飾り、その他装身具、土器、カノボス蓋、動物製スプーン、石製容器、かご、針、木櫃	Aufreier 2001, 141; Grajetzki 2010, 98	一部の杖類は木箱に納められていた。王。
	ダハシユール北シャフト82。	-	12王朝末~13王朝初期	前部屋(4.5立方m)シャフト墓(D.6.2m)	-	+	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	(ファイアアンス製ビーズ)	吉村、矢澤他 2012, 32-35	-
	ダハシユール北シャフト79。	-	13王朝初期	前部屋(13.7立方m)シャフト墓(D.6.7m)	-	+	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	カハ像含むファイアアンス製小像、土器	吉村、矢澤他 2012, 50-56	-
	ダハシユール北シャフト107。	-	12王朝後期~13王朝初期	前部屋(5.5立方m)シャフト墓(D.10.1m)	人形木棺あるいはマスク	+	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	眼の象眼、土器	吉村、矢澤他 2012, 53, 56-58	眼の象眼は人形木箱がミイラマスタに嵌め込まれていたと考えられる(吉村、矢澤他 2012, 58)
	763/セネブアエシシ(lady of the house)	F	アム3	前置付き北西部屋シャフト墓(D.6.9m)	二重箱型木棺、人形木棺	+	+	+	+	+	+	+	「エジプト王様」の衣類	カノボス箱、カノボス蓋、櫛飾り、その他装身具、土器、動物骨、セウレトレビーズ	Mace and Winbeck 1916; Grajetzki 2010, 101	未発掘。年代についてはBourriau 1991: 17; Grajetzki 2014: 17-35参照。一部の杖類は木箱に納められていた。王族?
	セウレトレト1世ビラミッド複合体, shaft7/26	-	中王国	シャフト墓	-	-	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	櫛飾り、フリント製ナイフ、牙あるいは爪形角製品	Arnold 1982, 43, 66, pl.79	-
	セウレトレト1世ビラミッド複合体, shaft15/28	-	中王国	シャフト墓	-	-	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	銘文付き石製品片	Arnold 1982, 43, 66, pl.79	-
リシエト	セウレトレト1世ビラミッド複合体, shaft19/41 [pit 20?]	-	中王国	南北合計10部屋シャフト墓	マスク?	-	-	-	-	+	-	+	「エジプト王様」の衣類	櫛飾り、その他ビーズ、櫛(loom weight)、金箔、土器	Arnold 1982, 45, 67-68, pls.52B, 80	出土遺物がその埋葬に属するかは不明
	セネブアエフの墓(chief lecture priest)	M	13王朝	-	二重箱型木棺	-	-	+	+	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	カノボス箱、カノボス蓋	Gautier and Lequier 1902, 74-79, fig.97; Grajetzki 2010, 101; Grajetzki 2014, 65	-
	"French Tomb"	-	セン3あるいはそれ以降	地下回廊墓	石棺、人形木棺 or マスク	+	-	-	-	+	-	-	「エジプト王様」の衣類	カノボス箱、土器、皿の象眼	Arnold 2008, 32; Grajetzki 2010, 102	-

道路名	墓番号/被葬者名(称号)	性別	時期	葬構造	棺	竈	壺	聖水	杖頭	柱棒	燈竿	短剣	弓矢	下エンブレ 王杖の表裏	他出土遺物	参考文献	備考
リシエト	センウセレト1 世ピタミッド墓 地,5102	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	Mace and Winick 1916, 83; Grajetzki 2010, 102; http://www. metmuseum.org/art/ collection/search/51426 6?sortBy=Relevance& amp;f=14.33&mp offset=0&rpp= 20&pos=1 (2017年8月14日閲覧)	-
リツカ	A174	-	セン1~ セン3	前部屋(5.2立方 m)北部屋(1.4 立方m)シャフト 墓(D.58m)	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	土器	Engelbach 1915, p.XLII	-
リツカ	A166/アウア シェ (coordinator of the temple staff)	M	セン1~ セン3	前部屋(5.4立方 m)北部屋(敷 付き(8.9立方 m)シャフト墓 (D.5.3m)) 二重筒形木棺の 中に丸形木棺、 (さらにミイラ マスク?)	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-	人形木棺葬具、木製カノ ボス蓋(蓋蓋から)、土器 ボス蓋(蓋蓋から)、土器 ボス蓋、土器	Engelbach 1915, 23-25, p.12, XXII, 8, XXIII; Grajetzki 2010, 102; Grajetzki 2014, 149	北部屋はほぼ手つかずの 状態を保っていた。南部 屋からはカノボス蓋蓋の み出土。木と漆棺は木棺 内より出土。
ハワラ	57/イウネフェ ル(the store-rooms)ま たはアケトヘテ ア	F	13王朝 アム3また はそれ以降	小瓶ピラミッド (内部には灰物 室と埋葬室)	石棺、箱型木棺、 入蓋木棺	-	+	-	-	-	+	-	-	+	箱型、その他葬具、土 器、7つの異なる新蓋(灰 器は10個の蓋)、銀製コホル ル、石製容器、金製器、銅製 ハス蓋、供物車、セウエルト ビーズ	Farag and Iskander 1971; Grajetzki 2010, 99	未定葬。王族。
ハワラ	A17/-	-	セン2~ アム3	前部屋(立方 m)シャフト墓 (D.4.6m)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器、飾飾り、その他葬具 100	Engelbach 1923, pl. LVIII; Grajetzki 2010, 100	-
ハワラ	A149/-	-	セン2~ アム3	前2部屋(1.19 立方m, 下22立 方m)シャフト 墓(上D.41m, 下 D.64m)	木棺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器、金箔 100	Engelbach 1923, pl. LVIII; Grajetzki 2010, 100	-
ハワラ	A105/-	-	セン2~ アム3	前部屋(22.2立 方m)シャフト 墓(D.81m)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器、円筒形ビーズ、ステラ 100	Engelbach 1923, 29, pls. LXXIV3; Grajetzki 2010, 100	-
ハワラ	A108/-	F	セン2~ アム3	前部屋(4.8立方 m)シャフト墓 (D.4.6m)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器	Engelbach 1923, pl.LIX; Grajetzki 2010, 100	-
ハワラ	A110/-	F	セン2~ アム3	前部屋(8.6立方 m)シャフト墓 (D.8m)、南に拡 張された部屋? あり(3.9立方 m)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器、飾飾り、その他ビーズ 100	Engelbach 1923, pl.LIX, pl.XIII 1; Grajetzki 2010, 100	-

アケトヘテという人物
とともに埋葬されたが視
風されているためとら
が宮廷タイプの埋葬をさ
れているのは不明瞭
(Grajetzki 2010, 100)。木
棺は埋葬のみでアケトヘ
テの名前が見られる
(Perrie, Wainwright and
Mackey 1912, 36)。

エジプト中王国時代の「宮廷タイプ (Court type)」の埋葬という枠組みについて

道跡名	墓主名(称号)	性別	時期	葬造	棺	壁画	墓	柱頭	柱棒	燧苳	短剣	弓矢	「下エジプト王族の表紙」	他出土遺物	参考文献	備考
ハラガ	A162/-	F	セン2~アメ3	土坑墓(D4.6m、11.4立方m)	木棺	-	-	-	-	(ファイアンス製ビーズ)	-	-	-	土器、石灰岩製小彫像	Engelbach 1923, pls.LIX, XIX.3, XXV.13; Grajetzki 2010, 100	-
	A171/-	-	セン2~アメ3	前部室(19立方m)シャフト墓(D7.9m)	-	-	-	-	-	(ファイアンス製ビーズ)	-	-	-	土器、円筒形ビーズ、未完成の彫像	Engelbach 1923, pl.LXI; Grajetzki 2010, 100	-
ハラガ	B280/hmyt (lady of the house)	MF	中王国後半	前部室(5.9立方m)北部屋(5.9立方m)シャフト墓(D5.8m)	木棺	-	-	-	-	(木製ビーズ)	+	-	-	カノボス器、カノボス器、木製道具、木製像、金箔	Engelbach 1923, pl.LX, pl.XVII.3, 4; Grajetzki 2010, 100	男女(夫婦)で埋葬されていた可能性が考えられている(Grajetzki 2004: 23-24)
	608/-	-	中王国後半	前部室(3.9立方m)シャフト墓(D6.59m)	人型木棺	+	-	-	-	+	-	-	-	人型木棺蓋飾、石灰岩製眼インレイ、金箔	Engelbach 1923, pl.LXII; Grajetzki 2010, 100; Grajetzki 2004: 25-27	-
ハラガ	S/サトホルトホルトイウスト(king's daughter)	F	アメ3	前室付き北部屋シャフト墓(D6.6m)、埋葬室の奥にはさらに前部室が置かれた。部屋が付属	石棺、銅製木棺、人型木棺	+	-	-	-	-	-	-	-	カノボス器、カノボス器、土器、石製容器、木製(ジュエリー-ボツタス)の象嵌、剃刀、磁石、鍍身具	Brunton 1920, 17-22; Petrie, Brunton and Murray 1923, 15-16, pl. XXV.7, XXVI; Grajetzki 2014-2015	前室西壁の壁画からはジュエリー-ボツタスが出土。埋葬室東壁の壁画からはカノボツタスが出上。
	906/ Khenemskhed, Nefert (lady of the house)	F	12王朝	シャフト墓(マスタハ?)	人型木棺(?)、マスタハ	-	-	-	-	+	-	-	-	銅飾り、供物卓、木製カー像、金箔、銅製石製眼インレイ、石灰岩製カノボス箱模製、土器	Petrie, Brunton and Murray 1923, 31, LXIII; Grajetzki 2010, 101	墓構造は文章のみで詳細不明(905と類似との記述)。墓も出土しているが、詳細は不明(stadtとの記述のみ)。
ラフーン	7	-	12王朝	前室付き北部屋シャフト墓(D8m)	石棺、おそろく水棺	+	-	-	-	(ファイアンス製ビーズ)	-	-	+	石製カノボス箱、木製カノボス箱、カノボス器、鍍身具、インレイ、フリント製品、土器、塗漆、動物骨	Brunton 1920, 11, 14-17; Petrie, Brunton and Murray 1923, 7, 14-15, pls.XXIII, XXV. A.10, LXIII; Grajetzki 2010, 101	発掘者は王女の埋葬と認識していたが文字資料は確認されていない。発掘者は銅飾りの副葬を吟味しているが円筒形ビーズのみ出土。
	650/-	-	12王朝	前室(short entrance passage)付き前部室シャフト墓	-	+	-	-	-	(ファイアンス製ビーズ)	-	-	-	供物卓、土器	Petrie, Brunton and Murray 1923, 32, pls. XXXVIA, LXIII; Grajetzki 2010, 101	部屋の東には供物卓
905/センウセレト///	M	12王朝	小室マスタハ	石棺	-	-	+	-	-	(ファイアンス製ビーズ)	-	-	-	アラバスター製カノボス器、銅飾り、その他ビーズ、ステラ片、銅製道具(chisel)の痕跡、土器	Petrie, Brunton and Murray 1923, 30-31, pls. XIII, XXXVI, LXVII, LXIII, LXIX; Grajetzki and Murray 1923, 31 参照。	墓構造は文章のみで詳細不明。銅飾りビーズの因はなくPetrie, Brunton and Murray 1923, 31 参照。
	9/ジェフテイナクト	M	アメ2	シャフト墓	二重箱彫木棺	+	-	+	+	(紅玉製ビーズ)	-	+	+	カノボス器、カノボス器、土器、銅、ヘス器、石製容器、ライオン顔形彫り付きベツド、サンダル	Kamal 1901; Grajetzki 2010, 96	-
90A/ジェフテイナクト	M	11王朝	シャフト墓(D.10.6m)	二重箱彫木棺、マスタハ	+	-	+	+	(木製模製)	+	-	-	-	カノボス器、銅飾り、その他鍍身具、靴、石製容器、ヘス器、模製、ヘス器、船などの木製模製、供物の模製	Freed, Berman, Dosey and Picardo 2009; D'Avria, Sue, Lacovara and Roehrig 1988, 109-117	-

道路名	墓番号/被葬者名(称号)	性別	時期	新構造	棺	壁画	壺	木頭	柱棒	燧石	短剣	弓矢	下エジプト王統の表裏	他出土遺物	参考文献	備考	
	-ウククハテブ(overseer of sealers)	M	12王朝中期	北銀器シャフト墓(D. 4.5m)	箱型木棺、マス	+	+	(ウラス柱やハカ杖は確認されず)	+	+	(木製模型)	-	-	カノボス箱、カノボス器、船やピレナル模造の木製模型、木製サンダル模造、木製鏡模型?、円筒形・球形ビーズ	Kamal 1912, 108-114; Hayes 1953, 282-283; Grajetzka 2004, 26-27; Grajetzka 2010, 102; http://www.metmuseum.org/art/collection/search/54284 ?sortBy=Relevance&mpzf=dagger+middle+kingdom&mpoffset=0&mpprp=20&mppos=14(2017年7月26日最終閲覧)	-	
	メイ													Mace and Winick 1916, 85, 92, 101, 103; Grajetzka 2010, 102; http://www.metmuseum.org/art/collection/search?&offset=0&q=Hapiankhuf&perPage=20&sortBy=Relevance&sortOrder=asc&pageSize=0 (2017年8月2日最終閲覧)			
	Hogarth Tomb 3/メセヘアイ(mayor)	M	12王朝	pit tomb	二重箱型木棺の中に入型木棺	-	-	+	+	(紅玉顔、ファイアリング、銅ビーズ、木製の柄)	(木製模型)	-	-	カノボス箱、飾飾り、その他装身具、鏡、セウエレットビーズ	Zitman 2010a, 154-164; Zitman 2010b, 210-214; Map 3.カイロ博物館にて発見	-	
	Hogarth Tomb 3/メセヘアイ(mayor)	M	メンチュヘテプ2世治世末~アムネムネ	岩窟墓、礼拝室の下に2つのシャフト	二重箱型木棺、マス	-	-	+	-	-	-	-	-	土器、飾飾り、その他装身具、多数の木製模型、サンダル模造、木製鏡、石製容器、木製容器、ハス窓木製模型、杏模造、身北道具の模造、木製	Zitman 2010a, 154-164; Zitman 2010b, 210-214; Map 3.カイロ博物館にて発見	未盗掘、アシムートにおける最も重要な墓の発見の一つであるが、19世紀の盗掘発掘によって、その記録は不十分。墓の構造なども不明瞭。	
	アシュエート													土器、飾飾り、その他装身具、石製容器、杖、ハス窓模型、動物骨、木製人物彫像、船や穀物倉庫などを表した木製模型、舟車、左前履、網、糸、袋、道具の模造、化粧板、鏡、サンダル模造、銅刀	Zitman 2010a, 206-212; Zitman 2010b, 257-259; Plan 36	計16人が埋葬された家族墓(Zitman 2010a, 210)	
	CPA Tomb 7, shaft 1/ネケタイ(treasurer)	M	11王朝末~12王朝初期	岩窟墓、礼拝室のFに4つのシャフト(shaft 1はその内の1つ)	箱型木棺、マス	-	-	+	-	-	+	+	-	Zitman 2010a, 206-212; Zitman 2010b, 257-259; Plan 36			
	リファ	25/-	12王朝	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	Petrie 1907, p.14, pls.XL, XLII; Polz 2007, 8, figs.120, 121	Petrie 1907, p.14, pls.XL, XLII; Polz 2007, 8, figs.120, 121	詳細不明	
	デーベ(Dra Abu el-Naga)	M	13王朝中期	単室シャフト墓	リシ(gishu)木棺	-	-	-	+	-	-	-	-	石製容器、パピルス、木製杖、walking stick、ファイアリングス製カカ隊、ゲーム、筆記用具、象牙(hippopotamus birth tusk)、鏡、化粧容器ケース、スカラブ	Mimiac 2009	-	
																	F = 女性、M = 男性、セン1 = センウセレット1世治世、アム2 = アメンエムハット2世治世、セン2 = センウセレット2世治世、セン3 = センウセレット3世、アム3 = アメンエムハット3世治世、+ = 有り、- = 無し、不明、灰色ハイライトは先行研究において宮廷タイアの典型と捉えられていた墓

3-1. 時期・地域

年代が判明している対象墓のうち、中王国時代前半の墓は4基のみで、いずれも中部エジプト地域の墓であった。これは、中王国時代中頃以降、突如王権の象徴を副葬する墓が増える (Grajetzki 2010: 91) という先行研究を追認する結果である。分布地域については、メンフィス・ファイユーム地域が40基と圧倒的に多い結果となった。王族が埋葬されていない当該地域の遺跡からも、11基確認された。これも、「宮廷タイプ」の主要な地域はメンフィス地域であるという先行研究 (Grajetzki 2003: 55) を追認する。中部エジプト地域からは7基、南部エジプト地域からは2基のみ確認された。これら中部・南部エジプト地域の墓は、いわば地方の有力者に該当すると言える。したがって、中部・南部エジプト地域では、より限られた人物のみが王権の象徴を副葬していた可能性が考えられる。

3-2. 墓構造

王族墓は、多くがピラミッドに隣接して造られている。その墓構造は、地下回廊に部屋が造られていたり、一つの回廊に複数の王女が埋葬されていたりと独特である。一方、王族以外の対象墓は、ほとんどが堅穴 (シャフト) に埋葬室が付属したシャフト墓 (図6) と呼ばれる構造である。大抵の場合、シャフト底部の南側に埋葬室が付属する。しかし、シャフト部の深さや埋葬室の広さは様々で、同遺跡内であっても幅が見られる。たとえば、ハラガ遺跡の8基のシャフト墓を見てみると、シャフト部の深さは最も浅い墓で約3.8m、最も深い墓で約8.1mである。埋葬室の広さも、最小は約3.9m³、最大は約22.2m³とばらつきが見られる。また、矢澤、吉村 2015では、ダハシュール北遺跡のシャフト墓がその規模によって、Small, Middle, Large に大別され、副葬品の内容との関係が整理された。その結果、「宮廷タイプ」の埋葬は、Middle と Large に存在することが明らかとなっている (矢澤、吉村 2015: 203-205)。そして、Middle と Large 間には、シャフト部の深さに差異が見られ、そのような墓造りにかかる労働量の多寡は、両者間の経済的な格差を示すと指摘されている (矢澤、吉村 2015: 206-207)。さらに他遺跡では、1つのシャフトに複数の埋葬室が造られていたり、埋葬室の手前に前室が付属している例などが確認されている。また、少数ではあるものの、対象墓にはシャフト墓以外に地下回廊墓や土坑墓も含まれる。土坑墓とは、シャフト墓よりも簡易な墓構造で、比較的浅い堅穴のみで構成される。対象墓の中では、ハラガ遺跡 A162号墓が該当する。メンフィス・ファイユーム地域では、こういった簡易な構造の墓にも王権の象徴が副葬されていたということは特筆すべきである。このように、墓の構造はシャフト墓が基本であったものの、埋葬室の数や前室の有無、シャフトの深さ、埋葬室の広さは様々で、ある程度の多様性があったと言える。

一方、複数の墓に共通する要素も確認された。それは、壁龕の存在である (図6)。墓の規模のみが発掘報告書内で述べられているために、詳細が不明な墓が多くを占める中⁽⁴⁾、少なくと

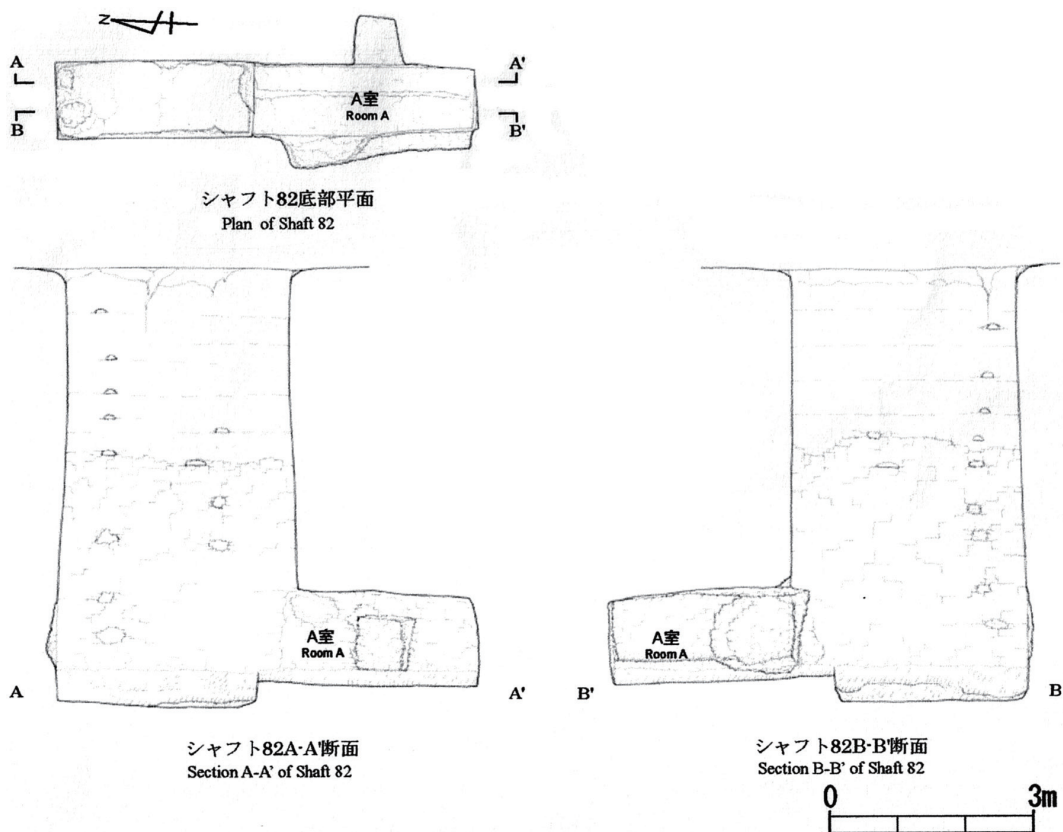


図6. 壁龕が埋葬室に付属しているシャフト墓の例（ダハシュール北遺跡シャフト82）

も17基の墓には壁龕が備わっていることが判明した。たとえば、ダハシュール北遺跡では、対象墓3基全ての墓に壁龕が確認された（吉村、矢澤他 2012: 32-35: 50-58）。これら3基の墓は、シャフト部の深さは約6.2m から10.1m、埋葬室の広さも約4.5㎡から13.7㎡と幅があるにも関わらず、壁龕が埋葬室内の東壁南側寄りに備わっているという点では共通していたのである。また、リシェト遺跡の‘French tomb’は地下回廊墓であったが、同じく壁龕が備わっており（Arnold 2008: 32）、さらに「宮廷タイプ」の典型とされたセネブティシヤホル王の墓においても確認されている（Mace and Winlock 1916; de Morgan 1895: fig.211）。では、このような壁龕は何を目的としたものであったのだろうか。先行研究では、カノポス箱・カノポス壺は大抵壁龕内に置かれたと言われている（Dodson 2001a: 232; D’Auria *et al.* 1988: 125）。カノポス壺とは、死者の臓器が入られた容器のことで、それらはさらにカノポス箱の中に納められる場合が多かった（Dodson 2001a: 231-234）。そして、古王国時代第4王朝には、カノピック⁽⁵⁾を被葬者の足元、つまり埋葬室内南部の壁龕内に置く習慣が確立された（Dodson 2001a: 232）。しばしばその位置は南東にずれているという。上述のダハシュール北遺跡のシャフト墓内で確認された壁龕の位置は、東

壁南側寄りであり、古王国時代のこの伝統を引き継いでいると言える。ただし、これらの墓からは、カノピックは出土していない。そこで、他の対象墓を見てみると、たとえば表2中のダハシユール遺跡サトウエレットの墓、リシェト遺跡セネブティシの墓、リッカ遺跡 A166号墓サウアジェトの墓、ラフーン遺跡8号墓では、壁龕内部から実際にカノピックが出土している。この中で、ダハシユール遺跡サトウエレットの墓、リシェト遺跡セネブティシの墓、ラフーン遺跡8号墓では、ダハシユール北遺跡の3基の墓と同じく、埋葬室内の東壁南側寄りに壁龕が備わっており、そこからカノピックが出土しているのである。これらのことから、盗掘や攪乱によって、実際にカノピックが出土していなくとも、壁龕はそれらが存在した痕跡として捉えられるのではないだろうか。先行研究においても、壁龕は被葬者がカノポス壺を用意する資力があったことを示すと指摘されている（矢澤、吉村 2015: 203）。

以上、墓構造については、ある程度の多様性が存在したことが判明した。それは、墓の形状だけでなく、同じシャフト墓という構造であっても、シャフト部の深さや埋葬室の広さには違いが見られるというものであった。一方、それらの違いを越えて、カノピックを示唆する壁龕という共通する要素が多数の墓に見られることが分かった。

3-3. 副葬品

「王権の象徴」について

はじめに、副葬品の中でも先行研究で重要視されていた杖類、棍棒、殻竿、短剣、弓、矢、「下エジプト王様式の衣装」について、具体的な出土傾向を追ってみたい。

まず、杖類は全地域で見られ、王族以外にも副葬されていた。棍棒も全地域から出土しているが、メンフィス・ファイユーム地域内では王族墓が中心で、王族の埋葬地以外の遺跡からは出土していない。他方、中部・南部エジプト地域では、5基の墓から棍棒が出土している。しかし、そのうち4基に副葬されたのは、木製のいわば模型であった。殻竿は、中王国時代中頃以降、最も頻繁に副葬された王権の象徴で、メンフィス・ファイユーム地域と中部エジプト地域の計35基の墓から出土している。ただし、殻竿を構成するビーズの素材には墓によって違いが見られた。王族や中部エジプト地域のものには、ファイアンスに加えしばしば紅玉髓製や金箔が施されたビーズが用いられたが、その他の殻竿ビーズは専らファイアンス製なのである。また、棍棒と同じく木製の模型も確認された（D'Auria *et al.* 1988: 116-117）。短剣に関しても、ハラガ遺跡 B280号墓やマイル遺跡ウクヘテブの墓、ハピアンケトフィの墓といった王族以外の墓からは、木製の模型が出土している。なお、出土墓が不明であるため対象墓には含めていないが、博物館所蔵資料の中にはリシェト北遺跡出土の木製短剣模型がある（MMA15.3.1102a, b）。弓と矢は第11王朝の一般的な副葬品で、テーベ（Thebes）に加え、リシェト遺跡やゲベレイン（Gebelein）遺跡からも出土している（Hayes 1953: 279-280）。しかし、他の王権の象徴とともに出土することは

稀有である。最後に、「下エジプト王様式の衣装」は、10基の墓から出土している。出土墓は、中部エジプト地域に埋葬されたジェフティナクトのほか、5人の王族とセネブティシといった特に社会的地位の高い被葬者の墓が中心である。その他出土墓は、いずれも王のピラミッド複合体内やその付近に位置している。シャフト墓であっても、埋葬室に前室が付属していたり、棺の一つに石棺が用いられていたり社会的地位が高かった様子が窺える⁽⁶⁾。出土墓不明で対象墓には含めていないものの、王族墓地であるリシェト遺跡では、「下エジプト王様式の衣装」が他のおそらく墓でも利用されていたことが分かっている (Arnold 1992: 75-76, pl.93, cat.216)。以上、先行研究では「王権の象徴」と一括りにされていたが、それぞれの実際の出土傾向には差異があったことが分かった。たとえば、棍棒と「下エジプト王様式の衣装」は、王族および王族と近い者に副葬される傾向があったが、殻笄は比較的広く利用されていた。これらのことから、王権の象徴と言っても、その中でさらに序列が存在した可能性が考えられよう。

単一埋葬内の組み合わせを見てみると、全ての王権の象徴が揃っている墓はなかったが、王族はフルセットに近いものを所有している場合が多く見られた。中でも、第13王朝にダハシュール遺跡に埋葬されたヌブヘテプティ王女とホル王の墓では、弓を除いた全てが揃っている。王族以外に関しては、中部エジプト地域に埋葬された被葬者に複数種類の王権の象徴が副葬される傾向にある。中でも、2人のジェフティナクト、ウクヘテプ、ハピアンケトフィの墓を見ると、杖類、棍棒、殻笄が重要なセットであった様子が窺える。対して、メンフィス・ファユーム地域の王族以外の墓では、盗掘や攪乱は考慮すべきではあるが、王権の象徴と言われるものの中でも殻笄を構成するビーズのみが出土している墓が多く、16基確認された。「宮廷タイプ」は、メンフィス・ファユーム地域に最も多いということであった。しかし、出土遺物を見てみると、確かに王権の象徴と言われるものは出土しているが、王族の持つセットとは程遠いことが分かった。むしろ、中部エジプト地域に埋葬された被葬者の方が王族に近いセットを持っていたと言える。

その他副葬品について

続いて、先行研究で十分に考慮されてこなかったその他出土遺物について言及し、「宮廷タイプ」の特徴を改めて捉え直したい。

・カノピック

表2を見ると、カノピックはこれまで先行研究において、「宮廷タイプ」の典型とされてきたほとんどの墓から出土している。王族以外も含めると、カノピックは対象墓のうち23基の墓から出土している。さらに、ラフーン遺跡906号墓からは、杖類、殻笄に加えて石灰岩製の小型カノボス箱の模型が出土している (Petrie, Brunton and Murray 1923, p.31, pl.LXIX 13)。また、墓構造において、壁龕が多数の墓で共通しており、そしてそれらはカノピックの存在を示唆するものであるということはすでに述べた。これをふまえ、カノボス箱 (上記の模型も含む)、カノボ

ス壺、壁龕のいずれかが検出された墓を確認した結果、対象墓中30基が該当した。半数以上の対象墓で確認されたと言える。このように、考古学的には「宮廷タイプ」の埋葬にカノピックがしばしば共伴することが判明した。

・襟飾り

「宮廷タイプ」の典型とされていた王族墓の特徴として、豪華な装身具が副葬されていたことが挙げられる (Williams 1975-76: 45)。その中でも、襟飾り (図7) は「宮廷タイプ」を特徴づける副葬品として捉えられる。というのも、フルセットに近い王権の象徴を所有している王族の墓からは、共通して襟飾りが出土しているからである。「宮廷タイプ」という概念が提唱されるきっかけとなったセネブティシの墓からは、3種類もの襟飾りが出土している (Mace and Winlock 1916: 66)。王族以外を含めると、対象墓のうち17基の墓から襟飾りが確認された。また、王族の「宮廷タイプ」に見られる特徴として、人型木棺やミイラマスクに被葬者が納められていることが挙げられていたが、中王国時代の人型木棺とマスクには、必ず襟飾りが描かれることが判明している (山崎 2016a: 182-190)。今回集成した「宮廷タイプ」の中には、王族以外でも人型木棺やミイラマスクが用いられていた埋葬が確認された。原形を留めていなくとも、ダハシュール北遺跡シャフト107やハラガ遺跡608号墓のように、眼の象嵌や人型木棺の鬘部分に使われたファイアンス製装飾が出土していることから、人型木棺またはマスクが利用されていたことが推測できる場合もあった。実際には襟飾りは出土していないが、襟飾りの装飾が施された人型木棺あるいはマスクに被葬者は納められていたということである。

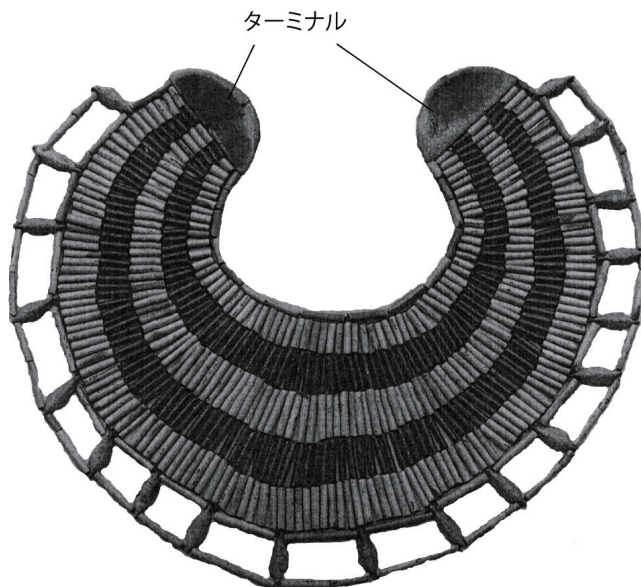


図7. 中王国時代の墓に副葬された襟飾り (サッカラテティピラミッド墓地遺跡 HMK69墓出土)

襟飾りは、表2に挙げた墓以外からも出土している。中王国時代には、少なくとも85基の墓で副葬品として利用されていた。しかし、その出土傾向には偏りがあり、メンフィス・ファイユーム地域が71基と圧倒的に多くを占め、特に中王国時代中頃～後半の出土墓が目立つ（山崎 2016b: 155）。この出土傾向は、これまで「宮廷タイプ」と捉えられてきた墓自体の分布状況と類似していると言える。このことから、襟飾りは「宮廷タイプ」と密接に関連する副葬品であったことが分かる。また、筆者は別稿において、中王国時代における中心地および王族の埋葬地の移動と襟飾りの出土傾向が合致することなどから、襟飾りは王族と深く関係する装身具であると結論付けた（山崎 2016b: 163, 165）。王族墓出土の襟飾りにのみ、実際に装着する際に必要な錘が付属している場合があることから、襟飾りは本来王族に属するものであったと考えられる。王権の象徴の一つとして捉えられていたのではないだろうか。

また、グライエツキーは、通夜の儀式に際して死者がオシリス神とみなされている傍証として、石棺に表現されたメルエンプタハ王を提示しているが（Grajetzki 2014: 150-152）、そこで王はヘカ杖や殻竿、「下エジプト王様式の衣装」に加え、襟飾りも装着している。さらに、箱型木棺内側のオブジェクト・フリーズに描かれたものと「宮廷タイプ」との関連性も指摘されていたが、オブジェクト・フリーズに特に頻繁に描かれたものとして、襟飾りが挙げられるのである（Willemms 1988: 215-224）。

以上より、襟飾りも「宮廷タイプ」を特徴づける副葬品の一つとして捉えるべきであろう。

・ファイアンス製小像

最後に、本論では先行研究とは異なる様相を持つ埋葬が確認された。それは、王権の象徴とファイアンス製小像がともに出土したダハシュール北遺跡シャフト79である。すでに述べたように、先行研究では、両者がともに出土することはなく、ファイアンス製小像が副葬された被葬者がオシリス神とみなされていた痕跡は全くないと指摘されていた（Grajetzki 2007: 51）。しかし、当該墓からは、殻竿ビーズに加え、カバやイヌを象った複数のファイアンス製小像が共伴して出土しているのである。

3-4. 小結

本章では、これまであまり注目されてこなかった考古資料に目を向け、「宮廷タイプ」のもつ特徴を改めて整理した。その結果、墓構造にはある程度の多様性が存在したほか、王権の象徴と一括りにされてきたものは、実際にはそれぞれ出土傾向に違いがあったことが判明した。また、王族・非王族間では、短剣や殻竿といった副葬品の素材に差異があったことも分かった。さらに、「宮廷タイプ」であっても、呪術的な意味合いを持つとされるファイアンス製小像を副葬品として取り入れている墓が確認された。これらのことから、「宮廷タイプ」は先行研究で言われていたよりも多様性に富んでいたと指摘できる。このような多様性が看取された一方、新たに「宮廷

タイプ」を特徴づける要素も確認された。それは、カノピックと襟飾りの存在である。特に、襟飾りは王族と密接に関係する装身具であったと考えられ、王権の象徴に加えられる可能性が挙げられた。

次章では、これら新たな「宮廷タイプ」を特徴づける要素をふまえた上で、「宮廷タイプ」の持つ意味を改めて考える。

4. 「宮廷タイプ」の意味と枠組みの再考

古代エジプト王朝時代における具体的な葬送儀礼のプロセスは、A. 墓地への行列、B. ミイラ処理場への行列、C. ミイラ処理、D. ミイラ処理後の儀式、E. 墓への行列、F. 口開けの儀式、G. 埋葬後地上で行われる儀式である (Hays 2010)。先行研究では、「宮廷タイプ」の埋葬とは、ミイラ化した死者のもとに神々が訪れる通夜を再現した埋葬であると指摘されていた。通夜は、上記で言うミイラ処理後の儀式に該当する。古代エジプトにおいて、死者は来世で再生・復活するために、オシリス神と同一視されることが非常に重要であった。この観念は少なくとも古王国時代から存在したが、それが顕著になったのは中王国時代で、死者自身の名前にオシリス神の名が冠されるようになった (D'Auria *et al.* 1988: 48; Hays 2011: 120-121, note.47)。そして、死者はミイラ処理をされることでオシリス神的な要素を得ることができた (Smith 2008: 3)。いわばミイラ化とは、死者の冥界の王としての戴冠式であり、またこの儀式の過程で、ミイラは通夜の場面で登場するライオンの装飾が施されたベッドに横たえられたのである (Willems 1997: 358)。つまり、通夜の儀式とは、すでにオシリス神と同一視されている死者に対しておこなわれたということである。

ここで、前章で得られた「宮廷タイプ」を特徴づける新たな要素を見てみたい。それは、カノピックがしばしば確認されたほか、これまで言われてきた王権の象徴に加え、襟飾りも重要な要素として捉えられるというものであった。これらは、葬送儀礼のどの段階で用いられたのであろうか。まず、カノピックは、死者の臓器を納めるための容器であり、ミイラ処理に際して用いられたことは明白である。例外的に末期王朝時代の棺には、ミイラ処理の場面が描かれたものがあり (図8)、そこには、ミイラが横たわるライオンの装飾が施されたベッドの下にカノポス壺が置かれている (D'Auria *et al.* 1988: 15)。また、古王国時代末以降は、死者の体内から取り除かれた臓器およびそれらが入れられたカノポス壺は、ホルスの4人の息子と結びつけられた (Dodson 2001a: 232)。そして、古代エジプトの葬祭文書の中で、ホルスの4人の息子は、オシリス神を守護する存在として書かれているのである (Dodson 2001b: 561-562)。これは、死者がオシリス神と同一視されている傍証となろう。次に、襟飾りは必ず木棺内から出土し、しばしばミイラ包みの中に入れている (Grajetzki 2014: 119; 山崎 2016b: 152)。こういった出土コンテクストを考慮すると、襟飾りも死者のミイラ処理の段階で用いられたと考えられる。また、襟飾りの

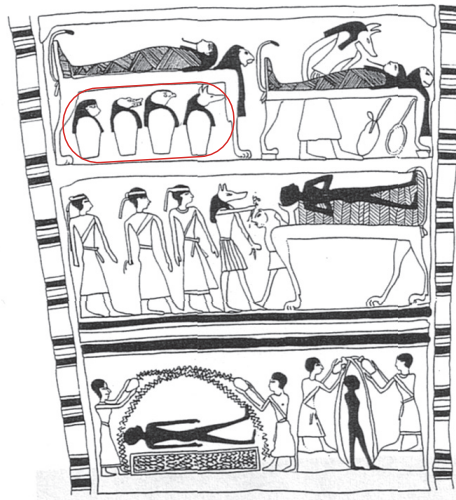


図8. 末期王朝時代の棺に描かれたミイラ処理の場面（赤枠内がカノポス壺）

中には、実用性を持たないものが多数確認された（Grajetzki 2014: 130; 山崎 2016: 152）。つまり、それらはそもそも副葬を目的として製作された葬送用品だということである。こういった葬送に特化したものが決まった場所に置かれたということは、儀式という規定化された行為の一端を示しているのではないだろうか。また、すでに先行研究において、「宮廷タイプ」を特徴づけるものとして、「下エジプト王様式の衣装」が挙げられていたが、これも出土位置が判明しているものは必ず木棺内から出土している。したがって、「下エジプト王様式の衣装」も、襟飾りとともにミイラ処理の段階、つまりオシリス神的な要素が死者に与えられる段階で必要とされたと考えられる。ヘカ杖や殻竿といったその他王権の象徴と言われるものも、通夜の場面に描かれているが、その役割は死者をオシリス神として扱うためなのである。

先行研究では、死者のオシリス神化が重要視されているにも関わらず、ミイラ処理後の通夜のみが「宮廷タイプ」の埋葬と関係する儀式として注目されてきた。しかし、通夜がおこなわれる背景として、死者はすでにオシリス神と同一視されていなければならず、そのためには、ミイラ処理が施されている必要がある。そして本論では、ミイラ処理の段階で必要とされたカノピックや襟飾りも、「宮廷タイプ」を特徴づけるものとして位置づけられた。これらのことから、「宮廷タイプ」とは、通夜だけでなく、その一つ前の段階であるミイラ処理までを含む儀式を再現する埋葬形態であったと考えられる。王朝時代において、ミイラ処理の儀式は、礼節（decorum）として図像表現されることは避けられた（Hays 2010: 5）。そのため、図像資料を主な根拠としてきた先行研究では見落とされていたのであろう。しかしながら、実際の考古資料からは、上述のようにミイラ処理と関連する儀式の一端が見られたと言える。「宮廷タイプ」において真に重要なのは、死者がオシリス神としてみなされているという点なのである。

以上をふまえ、ここで「宮廷タイプ」という枠組みについて再考したい。先行研究では、杖類、棍棒、殻竿、短剣、弓、矢といった「王権の象徴」を実物として所有しているか否かが大きな判断基準となっていた。しかし、「宮廷タイプ」において重要なのは、死者がオシリス神と同一視されていることであり、それは上記の「王権の象徴」以外からも窺うことができた。したがって、これまでは線引きすべきでないところに境界線が設けられてしまっていたと指摘できる。実際には、オシリス神化に必要なものの中に序列が存在した可能性は考えられるが、殻竿ビーズが出土した墓も、襟飾りが出土した墓も、同じく被葬者のオシリス神化が意図された埋葬であったと考えられる。殻竿ビーズが1点出土しているからといって、その墓だけを特別扱いすべきではなく、それは被葬者をオシリス神と同一視し、上記の儀式的再現を目指した墓々に見られる多様性の一つとして認識すべきなのである。ミイラ処理から通夜の儀式を完璧に近いかたちで再現できているのは、多重棺、襟飾りを含む王権の象徴、カノピックといったものを全て所有している王族などごく一部の人々であり、王権の象徴が副葬されたその他の墓は、そういった理想を目指した埋葬であったと捉えられる。つまり、これまでの「宮廷タイプ」という枠組みは適当ではなく、被葬者をオシリス神と同一視している要素が見られるか否かが真に重要であったと考えられるのである。

5. 実際の出土遺物に見られる理想的な葬送に向けた工夫

前章で述べた通り、ミイラ処理から通夜を完璧に近いかたちで再現できたのは、王族などごく一部の人々であった。その他の人々は、様々な方法で可能な限り死者のオシリス神化を試みたと考えられる。たとえば、本論でおこなった分析によって、これまで王権の象徴と括られたものの中でも、種類によって出土傾向には大きな差があったことが判明した。非王族は、数ある王権の象徴の中でも、手に入れられる最低限のものを揃え、死者のオシリス神化を図ったのではないだろうか。本章ではさらに、これまでの「宮廷タイプ」という枠組みにとらわれず、被葬者がオシリス神と同一視されている痕跡が見られる埋葬を取り上げたい。そして、中王国時代の特に王族以外は、どのように理想的な埋葬を目指していたのかを明らかにする。

まず、本論の分析により、複数種類の王権の象徴を副葬している非王族墓は少数で、殻竿のみが出土した墓が多いということが分かった。また、メンフィス・ファイユーム地域では、襟飾りだけの出土墓が少なくとも66基確認された(山崎 2016b)。したがって、複数種類の王権の象徴を揃えられない場合には、殻竿や襟飾りが死者をオシリス神と同一視するための最低限の副葬品として利用されたのではないだろうか。

さらに、使われた素材には、王族のものとは違いが見られた。すでに指摘した通り、王族に副葬された殻竿には、ファイアンスに加え紅玉髄や金箔が頻繁に用いられていた一方、王族以外の墓から出土した殻竿ビーズは、ほとんどがファイアンス製であった。同様の傾向は、襟飾りにも

見られる（山崎 2016b: 158）。王族墓出土の襟飾りは、紅玉髓やラピスラズリ、トルコ石、金、銀といった多種多様な素材のビーズで構成されていたが、非王族墓出土のものは専らファイアンズ製なのである。このように、王族が所有しているものと全く同じ殻笄や襟飾りを副葬することはできなくとも、異なる素材で代用し、できる限り理想に近づけようとしていた様子が窺える。またこれは、他の副葬品にも見られる。たとえば、短剣は主に王族墓から出土するが、少数ながら非王族墓からも確認された。しかし、それらの多くは刃部をも含めた全体が木製で、いわば模型であった（e.g. Engelbach 1923: pl. XVII 3）。実用性を持たない模型というかたちで代用したものと考えられる。また、本論ではミイラ処理の儀式と関連するカノピックも死者のオシリス神化において重要であると指摘した。そして、多数の墓から実際にカノボス箱やカノボス壺が出土している中、ラフーン遺跡906号墓からは、石灰岩製の小型カノボス箱模型が確認されたのである。これもまた、短剣と同様に、模型による代用と捉えることができよう。あるいは、埋葬する時点で実際にはカノピックが無くとも、壁龕という空間自体がそれらを示唆する役割を担うことがあったのかも知れない。実用性がなくとも、死者をオシリス神と同一視するために必要なものをシンボルとして所有することに意味が見出されていたのであろう。

上記のような素材や模型による代用という方法に加え、図像表現によって代用していた例も見られる。たとえば、人型木棺やミイラマスクには必ず襟飾りが描かれていることから、実際に襟飾りが副葬されていない場合でも、図像がその代用として機能すると考えられたのではないだろうか。また、本論において「下エジプト王様式の衣装」は、特に社会的地位の高い被葬者の墓からのみ出土することが判明している。そのような中、実際には副葬されていた痕跡がないものの、図像として人型木棺に描かれている例がある。それは、ダハシュール北遺跡シャフト65出土のセベクハトの人型木棺（図9、Baba and Yoshimura 2010: 11）とデル・エル＝ベルシャ遺跡14号墓出土のセピの人型木棺（Lacau 1904: 199）である。いずれも、人型木棺の腰部分に「下エジプト王様式の衣装」のビーズエプロンが描かれている。セピの人型木棺の頭部には、さらにネメス



図9. 「下エジプト王様式の衣装」が描かれた人型木棺
（ダハシュール北遺跡シャフト65出土セベクハトの人型木棺）

頭巾と呼ばれる王が装着する頭巾が表現されており、死者が王として扱われていた傍証となる。このように、実物は所有できなくとも、図像表現を代用として、死者をオシリス神と同一視しようとしていたのではないだろうか。

最後に、本論では死者がオシリス神と捉えられている埋葬からも、呪術的な要素をもつファイアンス製小像が出土している例に言及した。先行研究では、オシリス神化に必要な王権の象徴を所有している埋葬は、再生復活を目的とするファイアンス製小像を副葬する必要がなかったと指摘されているが (Miniaci 2014: 129)、必ずしもそうとは言えないということである。オシリス神化に必要な王権の象徴を完璧に揃えられたのは、王族などごく一部の人々のみで、上述の通りその他の人々は様々な工夫によって理想に近づけようとしていた。そして、中にはオシリス神化に加え、さらに異なる葬送観念に従った方法で来世での再生・復活を図った埋葬も存在したと考えられる。王族以外の人々は、先行研究で言われていたよりも、実際には現実的に状況を受け止め、葬送に際して柔軟に対応したのではないだろうか。

以上、死者をオシリス神と同一視し、儀式を再現するための完璧に近い副葬品セットを揃えられない人々は、王権の象徴の一部のみを取り入れたり、あるいは素材、模型、図像表現によって代用するという方法で、可能な限り理想的な埋葬に近づけようとしていたと言える。さらに、異なる葬送観念に基づく副葬品で、「補填」とも言える行為がおこなわれていたことが分かった。これまでは、「宮廷タイプ」という枠組みが存在したために見落とされていたが、実際には、様々な方法で来世での再生・復活に向けた準備がおこなわれていたのである。

おわりに

本論では、考古資料に焦点を当てて、中王国時代の「宮廷タイプ」について考察した。その結果、まず「宮廷タイプ」と言っても、そこには多様性があることが分かった。具体的には、墓の規模や王権の象徴と呼ばれる副葬品の出土傾向にそれぞれ違いが見られた。その一方で、「宮廷タイプ」を特徴づける新たな要素も確認された。それは、カノピックや襟飾りといった死者のミイラ処理の儀式に関連する副葬品の存在である。そして、先行研究では、「宮廷タイプ」と通夜の関連性ばかりが注目されていたが、実際にはその前段階の死者にオシリス神的な要素が与えられるミイラ処理をも意図した埋葬形態であった可能性を提示した。つまり、最も重要なのは、死者がオシリス神と同一視されているか否かという点だと考えたのである。そして、死者とオシリス神との同一視を意図した埋葬は、これまで「宮廷タイプ」と捉えられてこなかった墓にも見られた。たとえば、襟飾りだけが副葬された墓や王権の象徴が図像として棺に描かれていた埋葬である。これらの埋葬も、「宮廷タイプ」と括られてきた埋葬と目指している理想は同じであったと考えられる。したがって、本論では、これまでの「宮廷タイプ」という枠組みが適切ではないと指摘した。王族のように完璧に近い副葬品セットを揃えられない人々は、一部の王権の象徴だ

けを副葬したり、素材、模型、画像表現で代用したりすることで、死者とオシリス神との同一視を図ったのである。「宮廷タイプ」という枠組みにとらわれることなく各墓を見ることで、王権の象徴と言われてきたものを実物として所有する以外にも、理想的な葬送に向けて様々な工夫がされていたことが分かったと言える。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただいた早稲田大学文学学術院教授近藤二郎先生に感謝致します。また、金沢大学准教授河合望先生、東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授矢澤健先生には、原稿を読んでいたいただいた上で、細部にわたりご指導・ご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。

註

- (1) パッチ (Patch, D.C.) によると、「下エジプト王様式の衣装」とは、ピースエプロン、尻尾、垂れ布 (hip drape)、ツバメ形護符で構成される伝統的な王の衣装である (Patch 1995)。主に画像として表現され、最古の例がナルメル王のパレットに見られる。中王国時代には、画像だけでなく実物が墓から出土するようになる (Patch 1995; Grajetzki 2010: 92)。
- (2) 聖水壺は、これまでのところ王族墓からのみ出土している (Grajetzki 2010: 93)。壺の胴部に呪文が書かれている場合があり、それは後の時代に通夜の儀式を示す呪文の一部として使われているという (Grajetzki 2010: 93)。
- (3) 表2では、出土墓が判明している資料を対象とする。また、ここでは先行研究における「宮廷タイプ」の特徴を捉え直すことを目的としているため、表2に含める墓は、できる限り先行研究の基準に合わせた。先行研究では明確な基準は示されていないものの、まず弓・矢だけが出土した中王国時代前半の墓は、「宮廷タイプ」とは捉えられていない (e.g. Grajetzki 2010)。おそらく弓・矢は、第11王朝の一般的な副葬品であったために (Hayes 1953: 280)、「宮廷タイプ」とは異なる観念にもとづくと考えられたのであろう。杖類に関しても、湾曲していない straight staff と呼ばれる杖のみが出土した墓は「宮廷タイプ」には含まれていない。これも以前からすでに一般的な副葬品として利用されていたからであろう。以上より、表2では、弓・矢だけが出土した墓は含めず、また杖類は少なくともウアス杖、ヘカ杖、bent staff のいずれかが確認されることを基準とした。
- (4) 特にハラガ遺跡やリッカ遺跡では、一部を除き墓構造は詳述されていないため、ほとんどの対象墓における壁龕の有無は不明である。
- (5) 死者の臓器を納める用途を持つ壺や櫃は、一般的にカノピック (canopic) と呼称される (Dodson 2001a: 231)。そこで本論では、カノボス壺とカノボス箱の総称をカノピックとする。
- (6) 中でも、発掘報告書内において、ラフーン遺跡7号墓に埋葬された人物は、王女であると推測されていた (Brunton 1920: 11, 14-17; Petrie, Brunton and Murray 1923: 7, 14-15)。

エジプト中王国時代の「宮廷タイプ (Court type)」の埋葬という枠組みについて

引用文献

Arnold, D.

- 1980 “Dahschur, Dritter Grabungsbericht”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 36, pp.15-21.
1992 *The Pyramid Complex of Senwosret I: The South Cemeteries of Lisht*, III, New York.
1996 “Two New Mastabas of the Twelfth Dynasty at Dahshur”, *Egyptian Archaeology* 9, pp.23-25.
2002 *The Pyramid Complex of Senwosret III at Dahshur, Architectural Studies*, New York.
2008 *Middle Kingdom Tomb Architecture at Lisht*, New York.

Assmann, J.

- 2005 *Death and Salvation in Ancient Egypt*, Translated by Lorton, D., Ithaca. (Originally published 2001 as *Tod und Jenseits im alten Ägypten*)

Aufrere, S.

- 2001 “Le roi Aouibrê Hor: Essai d'interprétation du matériel découvert par Jacques de Morgan à Dahchour (1894)”, *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 101, pp.1-41.

D'Auria, Sue, P. Lacovara and C.H. Roehrig

- 1988 *Mummies and Magic: The Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston.

Baba, M. and S. Yoshimura

- 2010 “Dahshur North : Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37, pp.9-12.

Baines, J. and J. Malek

- 1980 *Atlas of Ancient Egypt*, Oxford.

Brunton, G.

- 1920 *Lahun I: The Treasure*, London.

Dodson, A.

- 2001a “Canopic Jars and Chests” in Redford, D.B. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt Volume 1*, Oxford, pp.231-234.
2001b “Four Sons of Horus” in Redford, D.B. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt Volume 1*, Oxford, pp.561-563.

Engelbach, R.

- 1915 *Riqqeh and Memphis VI*, London.
1923 *Harageh*, London

Farag, N., Z. Iskander

- 1971 *The Discovery of Neferuptah*, Cairo.

Firth, C. M. and B. Gunn

- 1926 *Teti Pyramid Cemeteries*. Cairo.

Freed, R.E., L.M. Berman, D.M. Doxey and N.S. Picardo.

- 2009 *The Secret of Tomb 10A Egypt 2000BC*, Boston.

Gautier MM.J.-E. and G. Jéquier

- 1902 *Mémoire sur les Fouilles de Licht*, Cairo.

Grajetzki, W.

- 2003 *Burial Customs in Ancient Egypt: Life in Death for Rich and Poor*, London.
2004 *Harageh: An Egyptian Burial Ground for the Rich, around 1800 BC*, London.
2007 “Box Coffins in the Late Middle Kingdom and Second Intermediate Period”, *Egitto e Vicino Oriente* 30, pp.41-54.

- 2010 *The Coffin of Zemathor and Other Rectangular Coffins of the Late Middle Kingdom and second Intermediate period*, London.
- 2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*, Philadelphia.
- 2016 "Places of Coffin Production in the Early and Late Middle Kingdom", *Egitto e Vicino Oriente* 39, pp.25-44.
- Hayes, W.C.
- 1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*, New York.
- Hays, H.
- 2010 "Funerary Rituals (Pharaonic Period)", in Dieleman, J. and W., Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles.
- 2011 "The Death of the Democratisation of the Afterlife", in Strudwick, N. and H. Strudwick (eds.), *Old Kingdom, New Perspectives: Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC*, Oxford, pp.115-131.
- Kamal, A.B.
- 1901 "Report sur les Fouilles exécutées à Deie-el-Bershe", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 2, pp.206-22.
- 1912 "Rapport sur les Fouilles exécutées dans la zone comprise entre Déirout au nord et Déir-el-Ganadlah, au sud", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 12, pp.97-127.
- Lacau, P.
- 1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.I*, Cairo.
- Lilyquist, C.
- 1979 "A Note on the Date of Senebtisi and other Middle Kingdom Groups", *Sarapis* 5, pp.27-28.
- Mace, A.C. and H.E. Winlock
- 1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Miniaci, G.
- 2009 "Reconceiving the Tomb in the Late Middle Kingdom: The Burial of the Accountant of the Main Enclosure Neferhotep at Dra Abu al-Naga", *Bulletin de L'Institut Français D'Archéologie Orientale* 109, pp.339-383.
- 2011 *Rishi Coffins and the Funerary Culture of Second Intermediate Period Egypt*, London.
- 2014 "The Collapse of Faience Figurine Production at the End of the Middle Kingdom: Reading the History of an Epoch between Postmodernism and Grand Narrative", *Journal of Egyptian History* 7, pp.109-142.
- Monet, P.
- 1960 *Les Constructions et le Tombeau de Chéchanq III à Tanis*, Paris.
- de Morgan, J.
- 1895 *Fouilles a Dahchour, Mars-Juin 1894*, Vienna.
- 1903 *Fouilles a Dahchour 1895*, Vienna.
- Patch, D.C.
- 1995 "A "Lower Egyptian" Costume: Its Origin, Development, and Meaning", *Journal of the American Research Center in Egypt* 32, pp.93-116.
- 2002 "The Beaded Garment of Sit-werut" in Eldamaty, M. and M. Trad (eds.), *Egyptian Museum Collections around the World, vol.II*, Cairo, pp.905-916.
- Petrie, W.M.F.
- 1907 *Gizeh and Rifeh*, London.
- Petrie, W.M.F., G.Brunton and M.A.Murray

エジプト中王国時代の「宮廷タイプ (Court type)」の埋葬という枠組みについて

- 1923 *Lahun II*, London.
- Petrie, W.M.F., Wainwright, G. A. and Mackay, E.
1912 *The Labyrinth, Gerzwh and Mazghuneh*, London.
- Polz, D.
2007 *Für die Ewigkeit Geschaffen: Die Särge des Imeni und der Geheset*, Mainz.
- Smith, M.
2008 “Osiris and the Deceased”, in Dieleman, J. and W., Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles.
- Willems, H.
1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
1997 “The Embalmer Embalmed: Remarks on the Meaning of the Decoration of Some Middle Kingdom Coffins”, in Jacobus van Dijk (ed.), *Essays on Ancient Egypt in Honour of Herman te Velde*, Gronningen, pp.343-372.
- Williams, B.
1975-76 “The Date of Senebtisi at Lisht and the Chronology of Major Groups and Deposits of the Middle Kingdom”, *Sarapis* 3, pp.41-55.
- Zitman, M.
2010a *The Necropolis of Assiut: A Case Study of Local Egyptian Funerary Culture from the Old Kingdom to the End of the Middle Kingdom, Text*, Leuven, Paris, Walpole, MA.
2010b *The Necropolis of Assiut: A Case Study of Local Egyptian Funerary Culture from the Old Kingdom to the End of the Middle Kingdom, Maps, Plans of Tombs, Illustrations, Tables, Lists*, Leuven, Paris, Walpole, MA.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子
2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告：第16次・第17次発掘調査」『エジプト学研究』18号、早稲田大学エジプト学会、21-67頁。
- 矢澤健、吉村作治
2015 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について：遺構の形状・規模・分布の分析」『オリエント』58巻2号、日本オリエント学会、196-210頁。
- 山崎世理愛
2016a 「画像資料からみたエジプト中王国時代の装身具研究序論」『エジプト学研究』22号、日本エジプト学会、179-203頁。
2016b 「エジプト中王国時代における襟飾りの副葬：画像表現との比較から見た副葬品選択の一側面」『西アジア考古学』17号、日本西アジア考古学会、149-167頁。
- MMA = メトロポリタン美術館所蔵資料

図表出典

- 図1. Baines and Malek 1980 をもとに筆者作成
図2. Gautier and Jéquier 1902, p.78, fig.97 一部加筆 (棍棒、穀竿、弓、杖類)、de Morgan 1903, pl.VII 一部改変 (短剣)、カイロ博物館にて筆者撮影 (「下エジプト王様式の衣装」)、Petrie, Brunton and Murray 1923, pl.XXV, 7 (聖水壺)
図3. Arnold 1992, pl.79, cat.98 一部加筆
図4. Willems 1988, fig.26

- 図5. Monet 1960, pl.XXX
図6. 吉村、矢澤他 2012, fig.10 一部改変
図7. Firth and Gunn 1926, pl.34B 一部加筆
図8. D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988, fig.5 一部加筆
図9. © 早稲田大学エジプト学研究所
表1. 筆者作成
表2. 筆者作成